



＼もっと便利に。もっとやさしい市役所へ。／

長野市行政DX推進ガイドライン

「気づき」を起点に「業務の再設計」と「デジタル技術」を活用した市民サービス向上への変革指針

令和9年4月

長野市



ご挨拶



調整中

日頃は市政に対しご理解
私は、「守る」「育てる」
データやバージョンアップ

ら躍進するよう、全力で取り組んでまいります。

市政運営に当たっては、「健幸増進都市」を目指してまいります。

私の思い描く「健幸増進都市」は、心と体の健康のみならず、社会の健全性を含む広い概念の「健康」が維持された「まち」の中で、生き生きと暮らしながら、様々な場面で感じられる幸福感を大事にしたいという考えに基づくものです。

さらに、他者や社会に貢献できた時の貢献感も幸福感そのものであり、長野冬季オリンピック・パラリンピックの開催実績は世界に対する市民の貢献感を深め、現在の市民のシビックプライドにもつながっていると考えています。

その誇りを更に深め、世界のナガノが世界中から尊敬を得られ続けられるまちでありたいと考えています。

皆さまには市政への一層のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

しつつも、必要なアップ
災害を乗り越え、本年か

長野市長 荻原 健司

目次（素案時点）

はじめに	1
目次	2
DX推進が必要とされる社会的背景	3
長野市行政DXで目指す姿	4
本ガイドライン策定の目的と背景	5
国・県の動向	6
DX推進における基本方針と重点取組事項	7
DX推進における4つの基本方針	8
DX推進における重点取組事項【全体像】	9
DX推進における重点取組事項【1～4】	10～13
DX成功に向けた5つの必要な視点	14～15
①ツールありき（手段の目的化）になっていないか？	16
②利用者の視点を考慮して設計されているか？	17
③部署横断の情報共有や連携がされているか？	18
④いきなり大きく始めようとしていないか？	19
⑤コスト意識を持ち、限られた資源を効果的に活かしているか？	20
必要な視点の活用例	21

具体的な運用方法	22
具体的な運用方法、推進の流れ	23
起点となる「気づき」を増やす	24
業務の再設計（BPR）	25
【事例紹介】移住推進課における申請オンライン化	26
庁内横断的な取組の推進体制	27
補足資料	28
本ガイドラインの策定プロセス	29
用語集	30
市民・職員アンケート調査結果	31～52

DX推進が必要とされる社会的背景

現代社会は、少子高齢化や人口減少といった構造的な課題に加え、AIやIoTなどのデジタル技術が急速に進展し、社会全体のデジタルシフトが加速しています。このような状況下で、市民ニーズは多様化・高度化しており、行政サービスの質向上と業務効率化・高度化が喫緊の課題となっています。変化の激しい時代において、市民生活の質の向上と持続可能な行政運営を実現するため、デジタル技術を活用した変革（DX）が注目され、その推進が強く求められています。

そもそもDX（デジタルトランスフォーメーション）とは？

デジタル

0と1で情報を表す概念・技術

+

トランスフォーメーション

「変革」「変容」「変換」「変形」

デジタル技術を活用して新たな価値を生み出す変革

社会の構造的課題

少子高齢化、人口減少



×

技術の急速な発展

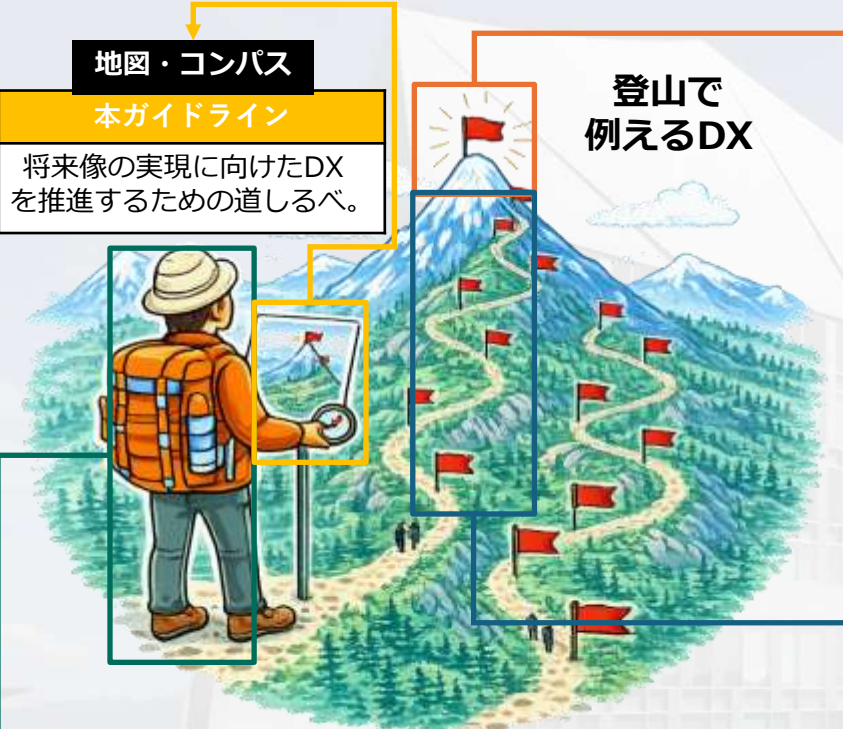
スマートフォン、AI、IoT



住民利便性向上 × 業務効率化 × 持続可能な行政
を同時に実現する概念として、DXに注目

長野市行政DXで目指す姿

長野市が考える行政DXとは、総合計画で掲げる「将来像」の実現に向けて、変化に適応し続けながら、職員一人ひとりが業務のあり方を見直し、デジタルを活用して現状を変革していく取組です。



地図・コンパス
本ガイドライン
将来像の実現に向けたDXを推進するための道しるべ。

登山者
あるべき職員像
「与えられた業務をこなす人」ではなく、主体的に市民のウェルビーイングを高め、持続可能なまちを実現するために**変化に適応し続けるプロフェッショナル**

これまで	これから
前例踏襲	価値起点
指示待ち	自走・自律
経験と勘	データと仮説
リスク回避	挑戦・学習



山頂

長野市の将来像の実現【目的】

1. みんながまちづくりを「自分ごと化」
2. 「長野市らしさ」の保全と発信
3. だれもが安心できる居場所、活躍できる舞台の創出
4. ウェルビーイング*を実感できる、持続可能なまちづくりの推進

※心身が健康で、社会的に満たされた「幸福・良い状態」

次期長野市総合計画（2027年度～2036年度）「まちの将来像（素案）について」より引用
<https://www.city.nagano.nagano.jp/documents/22442/03.pdf>

	登山道 将来像実現のための手段＝デジタル化、DX	
	デジタル化（改善）	DX（変革）
目的	業務を速く・正確に・楽にする	利用者目線で行政サービスや組織のあり方を変える
視点	現在の業務をどう効率化するか	あるべき姿から逆算して何を変えるか
変える対象	紙、入力、確認、集計、申請方法	業務プロセス、組織、職員の働き方、住民接点、政策立案
成果	効率化、省力化、ミス削減	住民価値の向上、地域課題解決、持続可能な行政運営
具体例	書類のデジタル化、申請オンライン化	データに基づく政策立案、プッシュ型行政サービス

本ガイドライン策定の目的と背景

職員一人ひとりが輝き、誇りを持ち活躍できる**持続的な行政運営環境実現に向けた変革指針として活用される**ことを目的に、本ガイドラインを策定します。

価値創出のインパクト

これまで

行政DX推進計画
(令和4～8年)

デジタル化（改善）

機運醸成および業務の効率化・省力化を中心に一定の成果。現在はデジタル化の途中。

デジタイゼーション
(情報のデジタル化)

- 紙をPDF化しデータ保存する
- Excelやシステムに入力する

紙からデジタルへ

「業務のやり方」は変わらない

デジタイゼーション
(業務プロセスのデジタル化)

- 申請をオンライン申請に変更する
- システム連携で入力を自動化する
- システムでエラーチェックする

効率化・省力化・ミス削減

事務をミスなく処理する人



「業務のやり方」は一部変わる

価値創出（成果・効果）のインパクトははるかに高い

これから

行政DX推進ガイドライン
(令和9年～)

DX（改革）

DX

(デジタルトランスフォーメーション)

- 住民目線、職員目線での行政サービスのあり方、設計検討
- 部門横断型サービスの実現
- 価値提供を追求した施策立案
- データを活用した行政経営

行政施策の在り方の再設計
地域の持続性と主体性の維持
地域への新たな価値提供

住民の幸福や豊かさ、持続可能性を請け負う地域プロデューサー



業務変革・行政改革につながる

マインド変革のインパクト

国・県の動向

本ガイドラインでは、デジタル庁、総務省、長野県が示すDX推進の趣旨及び重点取組事項を踏まえ、長野市におけるDX推進の基本的な考え方を整理します。国・県の動向と整合を図りながら、住民サービスの向上と持続可能な行政運営の実現につなげていきます。

デジタル庁 デジタル社会の実現に向けた重点計画 (令和7年6月13日)



https://www.digital.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/5ecac8cc-50f1-4168-b989-2bcaabffe870/768c946a/20250613_policies_priority_outline_01.pdf

総務省 自治体DX推進計画【第5.1版】 (令和8年1月30日)



https://www.soumu.go.jp/main_content/001053407.pdf

長野県 長野県DXアクションプラン (令和7年3月)



<https://www.pref.nagano.lg.jp/dx-promo/dx/documents/dxactionplan.pdf>

趣旨	制度・業務・システムを一体で捉え、誰一人取り残されないデジタル社会を実現する。	自治体が重点的に取り組むべきDX施策と国の支援策を具体化、実施にあたりBPRの取組を徹底する。	暮らし・産業・行政のDXを通じ、持続可能な地域社会を実現する。
重点取組事項	AI活用、行政手続のデジタル完結、データ連携、標準化、セキュリティ、人材育成。	フロントヤード改革、システムの標準化・共通化、公金収納におけるeL-QRの活用、マイナンバーカード利活用、セキュリティ対策、AI利用、テレワーク	住民窓口のスマート化、庁内業務改革、市町村行政事務DX、人材確保、共同化。
長野市ガイドラインでの考え方	DXをIT導入ではなく、業務・制度・システムを一体で見直す取組として位置づける。	全庁共通の進め方を示し、BPRを前提としたDX推進を徹底する。	県・他自治体との連携を意識し、住民窓口改革と庁内業務改革を一体で進める。

DX推進における基本方針と重点取組事項

DX推進における4つの基本方針

長野市のDX推進は、「環境・体制を整え（方針1）」「業務を整理し（方針2）」「データを活用してよりよいサービス・運用へ改善し（方針3）」「利用者の立場に立って利便性と配慮を両立させながら進める（方針4）」という、各現場実態に即した段階的かつ継続的な取組とします。

方針 1

DX推進を支える
環境・体制の整備

主体：情報システム課

方針 2

業務プロセス改革
(BPR) の徹底

主体：各所属

方針 3

データを活かした
効果的・効率的な
行政運営

主体：各所属

方針 4

利用者視点に立った
利便性と配慮の両立

主体：各所属



各現場実態に即した
段階的かつ継続的な取組

DX推進における重点取組事項【全体像】

市民・職員アンケート結果及び国・県の動向をもとに、令和9年度※は以下4点を重点取組とします。



※年度ごとに市民・職員アンケートを実施し、結果をもとに必要に応じて重点取組の見直し等を行うことします。

重点 取組 1	フロントヤード改革 目指す成果 市民が変化を実感できる利便性向上	行政手続 オンライン化の推進	デジタルに不慣れな 市民への配慮	
		【実施例】 ➢ オンライン申請 ➢ オンライン通知	【実施例】 ➢ スマホ教室 ➢ 支援員の配置	

背景

市民アンケートから、行政手続における来庁負担や手続の分かりにくさが、市民の負担となっている状況が明らかになりました。あわせて、デジタル化の進展に対する不安の声も見られることから、オンライン手続の拡充と対面による支援を両立させた、市民にやさしい市役所づくりが求められています。

オンライン手続の拡充

便利で簡単なオンライン手続を利用者目線でデザインし、わざわざ市役所に行かなくても必要な手続が分かりやすく行える環境を目指します。



住民目線のメリット

時間・場所を問わず手続きが完結

職員目線のメリット

ペーパーレス、転記入力の手数及びミス削減

※職員アンケートでは、非効率率の要因1位は紙・押印によるものでした。

キーワード
市役所に行かなくてもいい

デジタルに不慣れな方への支援

デジタル手続を基本としつつ、対面による支援や相談の機会を確保することで、誰ひとり取り残されることのない市役所の実現を目指します。



住民目線のメリット

デジタルが苦手でも安心

職員目線のメリット

対面でも電子データで極力申請等をしていただくことで（１）と同様のメリットが期待できる

キーワード
誰ひとり取り残さない

重点
取組
2

バックヤード改革

目指す成果

行政運営の質と持続性の向上

定型業務の
効率化・省力化

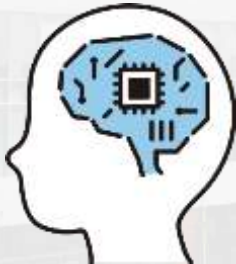
【実施例】
➢ AI、RPA、AI-OCR等
の活用

背景

職員アンケートから、業務の効率化やデジタル化を進めるためには、定型的な業務の自動化や省力化が重要であることが確認されました。繰り返し発生する業務による負担を軽減し、より価値の高い業務に注力できる環境を整えるため、バックヤード改革を進める必要があります。

定型業務の効率化・省力化

文字起こしや転記作業など、何度も繰り返し行う必要がある作業をツールに任せて職員は市民との対話や政策立案など、より価値ある仕事にシフトします。



住民目線のメリット
安定したサービス提供

職員目線のメリット
単純作業からの解放、ミス低減

キーワード
正々堂々
ラクをする

AIとは？

人工知能のこと。近年はChatGPTに代表される生成AIが業務活用される機会が増えており、文書作成・要約・問い合わせ対応などを効率化できる。

RPAとは？

画面操作やデータ入力などの定型作業を自動で実行する仕組み。人が行っていた“繰り返し作業”をそのまま代替できる。

AI-OCRとは？

紙やPDFの文字を読み取り、データ化する技術。手入力していた情報を自動でデジタルデータに変換できる。

重点 取組 3	DX人材の育成	DXを支える 人材・推進体制の整備	
	目指す成果 DXを担う組織力の強化	【実施例】 ➢ DX人材育成研修 ➢ 外部人材活用	

背景 DXの必要性は認識されている一方、知識・スキルや進め方の知識不足により実践に至っていない状況が確認されました。専門部署のみでDXを推進するのでは限界があり、全庁的な変革を実現するためには、現場の職員が自ら課題を捉え、BPRとデジタル活用を実践できる人材を継続的に育成することが不可欠です。

職員向けDX研修の充実

研修実施を通じて、職員一人ひとりがDXの本質や進め方を理解し、自ら業務の見直し・改善を行える状態を目指します。



住民目線のメリット

行政サービスの質が向上

職員目線のメリット

各所属でDXが推進可能
他所属の仲間づくりの機会

キーワード
DXを自分ごとに

外部人材の有効活用

専門的な知見やノウハウを持つ外部人材を活用し、内部だけでは難しいDXを推進することで、実現スピードを早めます。



住民目線のメリット

カイゼンスピード向上

職員目線のメリット

不足する知識・スキルを補完
DXノウハウの獲得

キーワード
一緒に進める

重点
取組
4

DX推進環境の整備

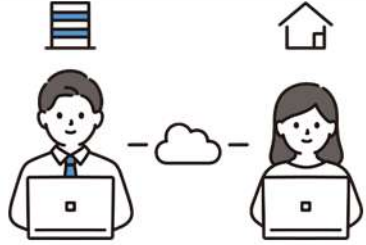
目指す成果

DXを支える基盤の強化

業務を支える
IT・業務環境の整備

【実施例】

- ITツールの庁内普及
- ネットワーク環境



背景

職員アンケートでは業務の効率化・デジタル化へのニーズが高い一方で、紙・押印文化や既存システムの制約等により改善が進まない状況が明らかとなりました。これらを踏まえ、職員が主体的にDXに取り組める環境・体制の整備が必要です。

利用可能なITツールの庁内周知

職員が利用可能なITツールが、「知らないために使われていない」状態を解消することで、業務の効率化・省力化を後押しします。



住民目線のメリット
行政サービスの質が向上

職員目線のメリット
各所属でDXが推進可能

キーワード
ITツールをもっと身近に

庁内ネットワークの見直し

職員がストレスなく業務を行えるよう、通信環境やアクセス制約を見直し、Web会議やクラウドサービス等を円滑に活用できる環境を整備します。



住民目線のメリット
対応スピード向上

職員目線のメリット
ストレスのない業務環境

キーワード
ストレスなく
仕事が進む

DX成功に向けた5つの必要な視点

DX成功に向けた5つの必要な視点

DXを成功させるには、便利なツールを導入するだけでなく、本質を理解し、目的・利用者視点・進め方・資源配分を問い直すことが欠かせません。以下の5つの視点について順に詳しく解説します。

1

ツールありき（手段の目的化）になっていないか？

ツールを入れても、業務自体を見直さなければ仕事が増えることも。

2

利用者の視点を考慮して設計されているか？

利用者が迷う仕組みは、行政側の都合で作られた仕組みかもしれない。

3

部署横断の情報共有や連携がされているか？

すでにあるものに目を向け、重複投資・車輪の再発明になっている可能性を疑う。

4

いきなり大きく始めようとしていないか？

完璧を待つほど、最初の一步は遠くなる。小さく試し、学びながら育てる。

5

コスト意識を持ち、限られた資源を効果的に活かしているか？

余力を生むために“やること”の前に“やめること”を決める。

① ツールありき（手段の目的化）になっていないか？

ツール導入は、DXの目的ではなく手段です。

ロボット掃除機も、床に物が散らかったままでは本来の力を発揮できず、かえって片付けの手間が増えてしまいます。

業務も同じように、手順やルール、情報の整理が不十分なままツールを入れると、効率化ではなく**混乱や仕事の増加**につながります。

まず業務を整理・再設計し、そのうえで必要なツールを選ぶことが重要です。

業務整理・変革には**BPR（ビジネスプロセス・リエンジニアリング）**という手法が有効です。



BPR 実施の流れ

BPRは今ある業務を前提に少しずつ良くするのではなく、業務の手順そのものをゼロベースで見直し、再設計すること。やり方を変える前に、「そもそもやる必要があるか」から考えていきます。

①検討

業務選定

②分析

フローチャートの作成

③設計

ECRSの実施

④実施

ITツールの選定
調達・実装

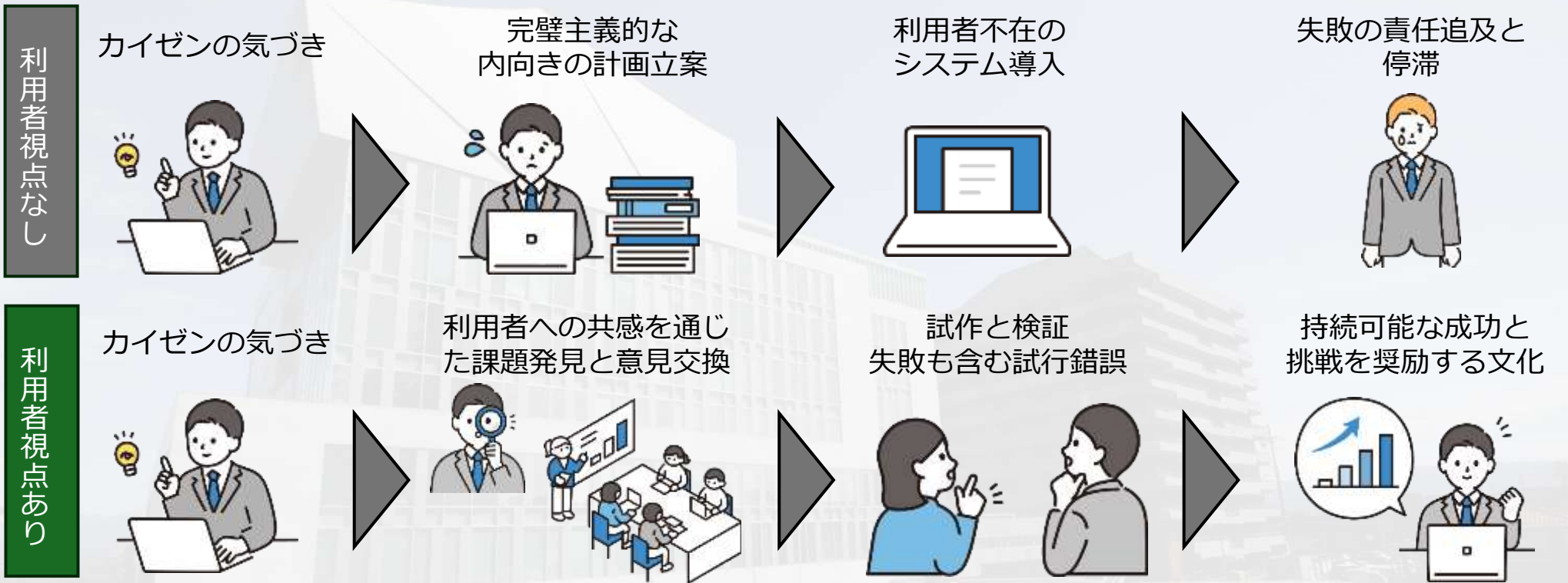
⑤評価

効果測定

Eliminate	やめる
Combine	まとめる
Rearrange	再配置
Simplify	単純化

②利用者の視点を考慮して設計されているか？

利用される仕組みを作るためには、利用者の視点を取り入れることが重要です。サービス提供者の都合だけでなく、利用者の視点に立って試作と検証を重ねることが、価値あるサービスにつながります。



利用者視点を取り入れるには
「デザイン思考」
 という考え方が有効です。

デザイン思考とは、デザイナーの思考プロセスをビジネスや社会課題の解決に応用する考え方。
 共感→問題定義→アイデア創造→プロトタイプ→検証の流れで実施します。

具体的なデザイン思考のフレームワーク（思考を深める型）の一例

ペルソナ
具体的な利用者像を設定

共感マップ
利用者像を様々な視点で理解

カスタマージャーニーマップ
サービスの流れに沿って感情を理解

③ 部署横断の情報共有や連携がされているか？

各課で工夫された取組は重要な改善・変革の一步です。一方で、それが共有されないまま進むと、同じような仕組みを繰り返し構築してしまう可能性があります。「既にあるものは何か」という視点を持ち、部署横断で情報連携することが重要です。

縦割組織の弊害

- 各課で個別にシステム・Excel・業務フローを作成
- 情報共有不足により検討をゼロから繰り返し
- 類似機能のツール・様式乱立



結果として“同じものを
何度も作っている”状態



解決の方向性

- 共通化できるものは共通化する
- 他部門の取組を前提に検討する
- 積極的に情報発信、
情報提供に
感謝を伝える



まず“既にあるもの”を
前提に考える

重複投資・車輪の再発明になっている可能性を疑い、
横連携を図る



④いきなり大きく始めようとしていないか？

新しい取り組みには一定の「生みの苦しみ」や「不確実性」が必ず伴います。大きく始めるのではなく、小さく始めて素早く「やって良かった」という成功体験の輪を広げていくことが継続のポイントです。

DXの前提 = 不確実

- ・ 正解が事前に分からない
- ・ 現場の業務はやってみて初めて分かることが多い
- ・ 机上の計画だけでは本質的な課題は顕在化しない
- ・ 小さく試し、学び（失敗）を早く得ることで成功に近づく



失敗を避けるにはどうしたらいいか？



失敗のリスクを許容できる範囲で小さく始める

自治体DXでよくあるリスク

スモールスタート案

住民サービスが止まらないか？



全部署・全住民を対象にせず、「特定の課・特定の手続き・一部期間」だけで試行

法令、個人情報、セキュリティに抵触しないか？



ダミーデータ・匿名化データや個人情報を扱わない業務で検証、段階的に範囲を広げる

現場の負担が過度に増えないか？



「困っている」「無駄だと思っている」など課題が顕在化している業務から人数・期間限定で始める

⑤コスト意識を持ち、限られた資源を効果的に活かしているか？

予算・人材・時間。限られた資源を最大限に有効活用する視点、当たり前を見直す発想の転換がDXには必要です。全部やる前提では、変わるための余力は生まれません。「やること」の前に引き算思考で「やめること」を決めていきましょう。

「やめるべきこと」をあぶり出す視点

習慣ややり方に対する疑問を持ち、その理由を探る

おばあちゃんの七面鳥

七面鳥は尻尾と頭を切ってオーブンに入れるのよ

どうして切るの？

1

おばあちゃんにそう教わったからなんだけど・・・

2

ガスが抜けて美味しくなるのか？

おばあちゃん、どうして七面鳥の尻尾と頭を切るの？

あー、それはね・・・

3

昔はオーブンが小さくて丸ごと入らなかったからなの

4

入るなら切らなくてもOK

昔の制約がいつか当たり前のルールに

昔は七面鳥を焼くときにオーブンが小さすぎたために、どうしても尻尾と頭を切らざるをえなかった・・・
というのが真相。オーブンが大きい場合は、わざわざ尻尾と頭を切る必要はない、ということです。

“トヨタには、たくさんの「七面鳥の話」が転がっていました。おそらく日本の会社にも、たくさん転がっていると思います。”

特に多くみられる不要な業務・手順

- 業務のアウトプットが有効活用されていない業務
- 部門間または担当者間で重複した業務
- 必要以上にチェックや承認が行われている業務



必要な視点の活用例

「必要な視点」は、さまざまな取組を失敗しにくい形に整えるための共通フレームです。ここではオンライン化を例に、よくある落とし穴を見える化し、回避の打ち手につなげる使い方を示します。

テーマ：手続きオンライン化

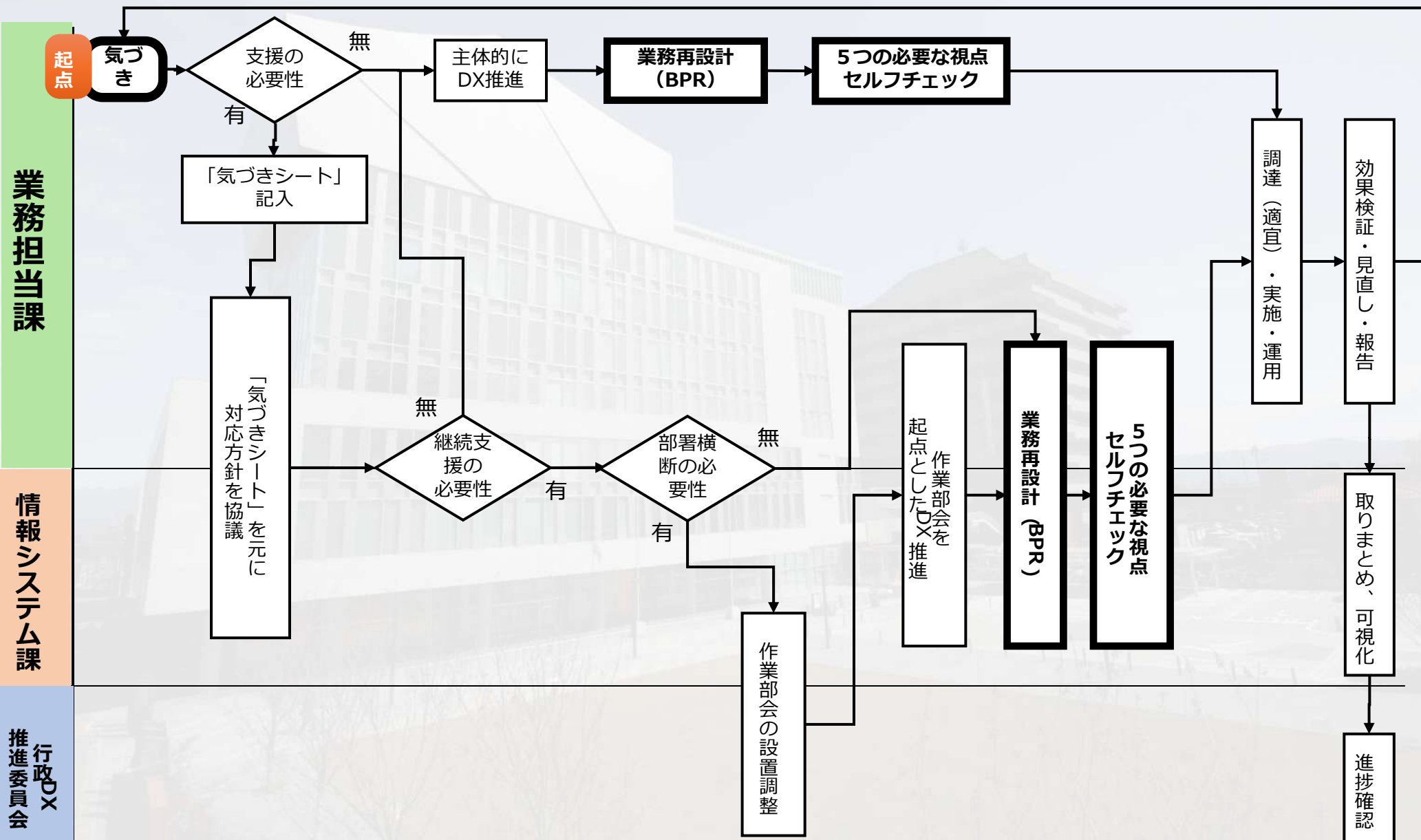


	必要な視点	よくある落とし穴	回避例
1	ツールありき（手段の目的化）になっていないか？	「とにかくオンライン化」の号令でオンライン化はされたものの、紙とオンラインが併存し、現場が二重処理で疲弊。	バックオフィス側の自動化・連携を要件化。業務プロセス全体をオンライン化前に整理。
2	利用者の視点を考慮して設計されているか？	「オンラインならではの」配慮（郵便番号自動入力、マイナンバー連携等）がなく、結局ラクにならない。	可能な限りの自動化、「入力させない設計」をする。
3	部門横断の情報共有や連携がされているか？	各課ごとに個別にオンライン化・システム導入を進め、類似機能の仕組みや様式が乱立する。	他部門の取組や既存の仕組みを前提に検討し、積極的に情報共有を行う。
4	いきなり大きく始めようとしていないか？	すべての手続きを網羅するポータルサイトを作ろうとし、機能が膨れ上がり開発が長期化。	試す→学ぶ→育てるを前提に、最小機能で出し成功体験を作って横展開。
5	コスト意識を持ち、限られた資源を効果的に活かしているか？	「オンライン化率100%」に縛られ、年数件の手続きや例外処理まで対応→削減効果と見合わない。	定性・定量の効果が見込めない場合は計画を見直す。

具体的な運用方法

具体的な運用方法、推進の流れ

「気づき」を起点に「業務の再設計」を前提としたDXを推進します。ポイントとなる部分を太枠で示しており、次ページ以降で解説します。



起点となる「気づき」を増やす

「気づき」を起点に「業務の再設計」と「デジタル技術」を活用した市民サービス向上を目指します。

気づきとは？

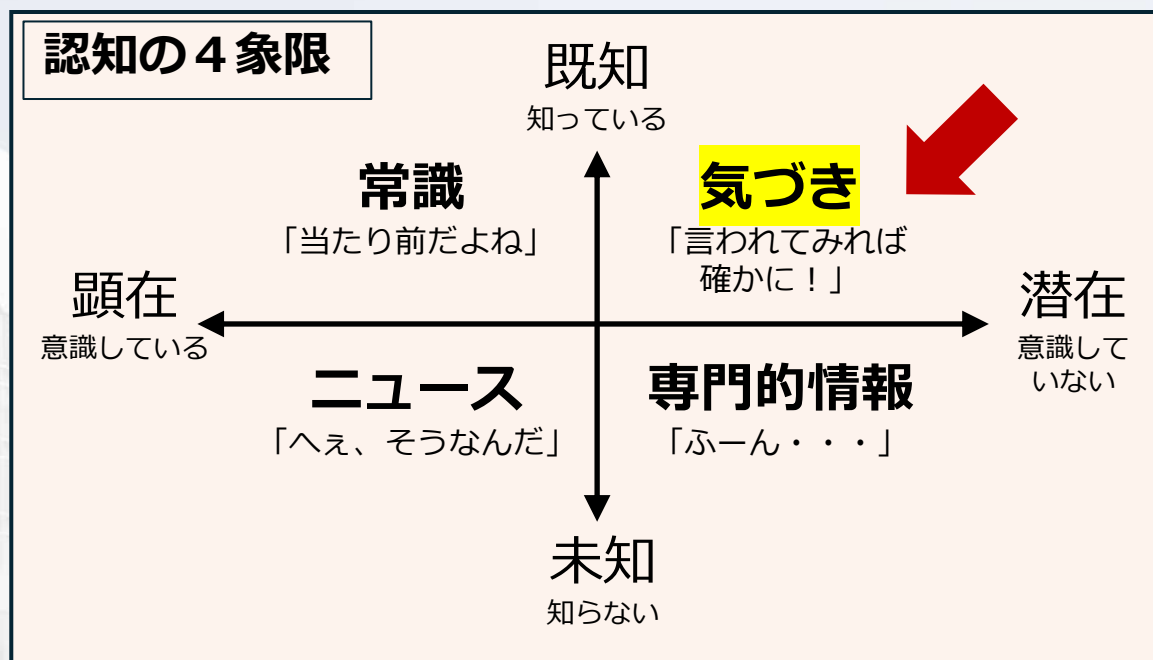
気づきとは、“知っている（既知）”のに、普段は意識していない（潜在）ことが、言語化されて表に上がった状態です。

新しい知識（ニュース）を得たというより、既に知っていたはずの違和感・前提・矛盾がハッキリ見えるようになった瞬間を指します。

改善の出発点、問題提起の種となります。

【具体例】

- 市民から紙で提出された申請書の入力に時間がかかる
- 相談予約の受付も電話やメールなので、電子化できないか？



Copyright © 2019

気づきを増やすには？

①意識するものを決める

興味を持つ重要性「カラーバス効果」

カラーバス効果（Color Bath＝色を浴びる）とは、意識したものが急に目につくようになる現象。

例えば「職員が困っている瞬間を拾おう」と意識すると「会議での一言にヒントを見つけられる」等の効果があります。



②多くの事例を知る

自分の引き出しを増やす

改善事例を知ることによって、「うちの当たり前」が相対化され、同じ課題でも別の解き方が見えるようになります。

事例を庁内に周知し、研修や事例集などで共有することで、別部署の新たな気づき（横展開）も誘発できます。



③視点を変える

違う所属の方と会話、利用者視点を持つ

現場担当者の視点だけでなく、違う視点で業務を見直すと、見落としていたムリ・ムダに気づきやすくなります。

他所属の職員に“初見で見てもらう”だけでも、説明の難しさや手順の分かりにくさが言語化され、気づきが一気に増えます。

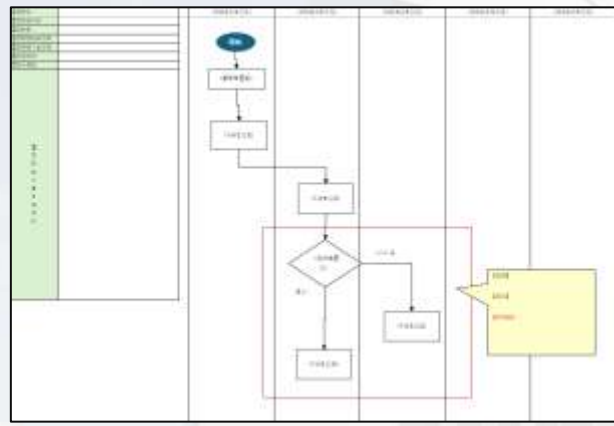


業務の再設計（BPR）

「DX成功に必要な5つの視点」が担保されるように、本質的な課題解決へ進むためのワークシートを用意しています。
 長野市職員の皆様は庁内ポータルにて配布しておりますので、適宜活用ください。

業務フローチャート

業務に関するすべての関係者がどのような動きをしているか俯瞰



デザイン思考フレームワーク

具体的な利用者像を描き、利用者目線を理解してサービス設計するためのワークシート

ワークシートの活用、問題定義

具体的な利用者像を描き、利用者目線を理解してサービス設計するためのワークシート

ワークシートの活用、問題定義

具体的な利用者像を描き、利用者目線を理解してサービス設計するためのワークシート

企画書テンプレート

現状・課題・解決策・利用者目線および職員目線の費用対効果・スケジュール

企画書タイトル		所属・担当者名	
背景・現状分析		課題（ネガティブポイント）	
企画の目的・目標		参考事例（自治体名、URL等）	
企画の内容、解決手段		参考事例（自治体名、URL等）	

【初期費用】 【継続費用】	【初期費用】 【継続費用】
【初期費用】 【継続費用】	【初期費用】 【継続費用】

【初期費用】 【継続費用】	【初期費用】 【継続費用】
【初期費用】 【継続費用】	【初期費用】 【継続費用】

【初期費用】 【継続費用】	【初期費用】 【継続費用】
【初期費用】 【継続費用】	【初期費用】 【継続費用】

庁内横断的な取組の推進体制

各所属の主体的な取組を基本とし、横断的な検討体制や技術支援、全庁方針のもとでDXを推進していくための体制です。

